

平成 27 年「北方領土の日」記念大会

記念講演「北方領土と日ロ交渉の行方」

講師 石川 一洋 氏 (NHK 放送総局開設委員室解説主幹)

日時 2015 年 1 月 31 日 (土) 13 : 30 ~

場所 ボルファートとやま



今、ご紹介いただきました NHK で解説委員をしております、石川といいます。東京で北方領土返還運動をやっている方から、「富山は非常に大事なところだから、心して行ってほしい」ということを言われてきて、少し緊張しております。

実は、昨日まで新潟でシンポジウムがありまして、勉強のためそれに参加し、夕方、富山に列車で来たわけですが、途中、富山県といいますと日本でも北海道に続いて旧島民の多い所ということで、大野先生にもお願いしまして、旧島民の方と食事を共にする機会を得ました。黒部市の生地という所に恥ずかしながら初めて行きまして、そこに「北方住宅前」というバス停があると聞きまして、北方領土は富山できちんと生きていることを非常に実感いたしました。

(以下、スライド併用)

#1

さて、今日は講演ということですが、まず、2 月 7 日は「北方領土の日」ということですので、その歴史的意義はどういうものか、もう一度考えてみたい。それから、今は北方領土問題交渉は、ウクライナ危機に大きく影響されているわけですが、北方領土問題とウクライナ危機というのは、一つの共通の歴史的な根っこがあると思うので、その点です。それから、安倍政権の対ロ外交の見通しを話していきたいと思います。

日ロ通好条約

今年は戦後 70 年と、先ほどからたびたび言われているように、北方領土がロシアに占拠されてから 70 年です。しかし、もう一つの記念の年でございます。それは日ロ通好条約、日本とロシアの間の初めての条約が締結されてから 160 年という記念の年でもございます。北方領土の日の 2 月 7 日は、この 1855 年に日ロ通好条約が締結された日、その日をこの「北方領土の日」としているわけです。

#2

ここに映し出したのは、私がモスクワにおりましたときに見せてもらった、ロシア外務省公文書館に保管されている日ロ通好条約の日本語原文です。日本側の同じ原文はあったわけですが、残念ながら関東大震災の火災で燃えてしまい、日本側には残っていません。今、原文はロシアの公文書館に残されています。その第 2 条に、今より日本国とロシア国との境は、択捉島とウルップ島の間にするということが明確に書かれているわけです。

この日ロ通好条約というのは、日本にとっては外国と交渉によって国境を確定した最初の条約でございます。その意味で、日本の外交史にとっても、歴史的な意義を持つ画期的な条約だといえます。その当時の日ロの交渉、それぞれの全権代表は日本側が川路聖謨

定奉行兼海防係、それからロシア側はプチャーチン提督です。この二人がかなり長期間の交渉をした上で、この日口通好条約を締結しました。この当時、この二人はお互いに尊敬していました。川路聖謨は、プチャーチンについては「ただならざる者」と、非常に豪胆かつ知恵があるというふうに評しておりますし、プチャーチン提督は、川路聖謨については、「ヨーロッパのどの国に出しても、これほどの知恵とユーモアを解する人はいない」と高く評価していたわけです。

#3

この1855年になぜロシアが日本との条約締結を求めたのか。ロシア側にどういう事情があったのかをちょっと考えてみたいと思います。

その当時は、ロシア帝国です。ロシア帝国というのは、その当時は、西はポーランドからフィンランド、東はアラスカまで世界最大の版図を誇る帝国でした。その皇帝絶対専制君主が、その当時はニコライ1世です。1825年に皇帝となり、1855年まで30年間、ロシア帝国を統治しました。彼の政治というのは、当時、ヨーロッパのフランス革命などさまざまな革命運動があったとき、その革命運動を徹底して弾圧するという一方で、ヨーロッパの中では保守反動の代表といわれたわけです。当時、ロシア帝国は、クリミア戦争を戦っている最中でした。このクリミア戦争というのは、ロシア帝国対オスマントルコ、イギリス・フランスの連合軍の戦いということで、これは黒海から地中海の覇権を巡る争いでしたが、このときロシアはクリミア戦争で、近代化、工業化を進めた英仏の軍隊に対して敗北してしまうのです。ロシアという国は、西で何かあると東に出てくるという国なのです。西でこのとき、ロシア帝国の南下政策、あるいは地中海の方に行こうというのが挫折すると、彼らは東へ進むことが起きている。つまり、今のロシアの置かれた状況と似ていないこともないわけです。

このニコライ1世は、非常に今に通じる指令・命令をプチャーチンに対して出しているわけです。プチャーチン提督を日本に派遣するのは1850年ごろから決まっていたわけですが、そのときロシア帝政の内部では、武力交渉論、砲艦外交をすべきか、平和交渉すべきか、このような論争があったわけです。そのときに、ロシア帝国では、例えばシーボルト事件で有名なオランダ人学者のシーボルトを招いて彼の意見を聞いてみるなど、さまざまな日本に関する意見を聞いた上で、最終的には平和交渉で行くことを定めたわけです。それが、このニコライ1世の訓令というものとして残っております。これは外交交渉方針をあらかじめプチャーチンに対して命令したわけです。国境線は択捉とウルップの間でよいと、交渉前からロシア帝国がそう決めていたわけです。ただし、このプチャーチンというのはなかなか敵もさる者で、交渉したとき、択捉はロシアのものだと、最初に択捉島を吹っかけてきたのです。交渉を択捉問題に引き込んだ上で、ロシア側は妥協したということで、択捉は日本のものにした。ただ、実際は、最初から択捉とウルップの間でいいという交渉方針でした。ロシアと交渉する場合には、なかなか向こうもしたたかであるということです。

もっと重要なのは、ニコライ1世のその後です。国境線の確定は重要だけれども、もっと重要なのは、日本との貿易なのだ。国境線の確定をするというと、日本は交渉に応じざるを得なくなる。それで条約を結び、外交関係を開いて、日本と貿易することがロシアに

とっては死活的に重要だという指令を言っています。つまり、条約を結ぶことも大事けれども、条約を結んだ後、外交関係を開いた後に、日本との良好な関係が大事であるということです。だから、プチャーチンに対してはできる限り日本の法令、文化を尊重し、礼儀正しい交渉をするようにと命じたわけです。だから、当時アメリカからもペリー提督が来たわけですが、こちらは砲艦外交で来ました。交渉に応じなければ、江戸湾に行って撃つぞと。「上喜撰（蒸気船）たつた四杯で夜も眠れず」という狂歌もありましたが、この武力をもった交渉方針と比較すると、プチャーチンの方は、確かにその背後にはロシア帝国という強大な力はありませんでしたが、日本との交渉は非常に礼儀正しかった。故に、幕府の重臣たちの間では、アメリカよりもロシアを好意的に捉える意見が非常に強かったことが言われています。

これはどういうことかといいますと、その当時、ロシアはハバロフスク、ウラジオストクの辺りに出てきたわけです。ただし、まだシベリア鉄道もない。そうすると、その極東シベリアを開発するためには日本からいろいろなものを貿易することによって物資が必要になる。つまり、われわれは国境線、領土の確定を求め、彼らは極東シベリアのための日本との関係、経済関係を求める。今に通じる日ロ関係の原点があるわけです。

実際、条約は調印され、批准されたのはアレクサンダー2世の時代です。アレクサンダー2世も26年間ロシアを統治したわけですが、彼は父親のニコライ1世とは逆に、農奴解放、それからさまざまな改革を行った改革王といわれていますが、最後は、テロリストの自爆によって爆死しました。テロによって殺されたということです。これもまた、その後のロシアの運命を象徴するような皇帝であったわけです。

この日ロ通好条約を批准したのがアレクサンダー2世ですが、彼はプチャーチンに対して最大限評価して、プチャーチンに伯爵の位を与えます。プチャーチン家に紋章を授けます。これがそのプチャーチン家の紋章です。ちょっと分かりにくいかもしれませんが、向かって右側はロシアの海軍、軍人です。こちらにいるのは日本、日本人です。この両方をつないで、上がヘダ号です。プチャーチンの一行は、大地震に伴う大津波で船を失い、日本の戸田で、幕府の支援もあって西洋式のヘダ号を造り、ロシアに戻るわけです。そういう船があります。つまり、アレクサンダー2世は、日本とロシアの国境線を確定し、外交関係を開き、交易を開いたプチャーチンの功績を最大限に評価していたことが、プチャーチンに与えた紋章で分かると思います。

「固有の領土」とは

昨年、私は、北方領土をビザ無しで初めて行くことができました。ロシアをずっとやっていたものですから、なかなか北方領土に入る機会がなかったのですが、昨年、国後島と択捉島を訪れてきました。これは、シャナの辺りの湾から見た散布山で、大変美しいです。これは日本の領土だという気持ちを強くするわけです。昨日、黒部の生地を訪ね、やはり、固有の領土というのは何なのか。それはやはり歴史であって、人の営みであるだろうと思うわけです。その意味で、特に歯舞群島の開発、ここで日本における例えば昆布の普及は、まさに富山の方々のご努力により、日本全国に昆布というものが広まり、島の漁業開発も進み、それが日本固有の領土とする大きな大きな歴史となっているわけです。

ただ、ここで一つ注意していただきたいことがあります。固有の領土というのは、われ

われ日本人にとっては非常に分かりやすい概念なのです。ただ、これが必ずしも外国の人に説明したときに全ての外国の人に分かるというわけではないということです。

これはどういうことかといいますと、日本民族、日本人の歴史というのは、世界的に大変珍しいことがあります。例えば、『古事記』の「国生み」の章を見てください。「大八島の国」とあります。本州から壱岐島や対馬、隠岐島、佐渡島、淡路島、四国、九州、八つの島が生まれたという神話です。これが日本の原点です。しかし、『古事記』の時代から、これに琉球と北海道、千島列島を加えれば、今の日本領土となるわけです。つまり、1600年ぐらい前から、日本人はこの辺りが日本だというものを、もう大まかにつかんでいたということです。つまり、民族と言語と領域というのが一致する極めて珍しい国だということです。だから、われわれにとっては、固有の領土というのは、もうぴったり来るのです。

しかし、外国は、なかなかそうはいきません。特に、大陸国は。例えば、アメリカの固有の領土とはどこでしょうか。あるいは、ロシア固有の領土はどこですか。ロシアがハバロフスク、ウラジオストクに来たのは19世紀半ばにすぎません。17世紀、江戸時代初め、ロマノフ王朝、ロシア帝国が始まったときですが、その辺りはウラルより西です。そもそもロシア国家の源流は、今のウクライナの辺りにあります。近代ドイツは、19世紀にプロイセンという国が統一してできました。では、そのプロイセン領は今この国の領地になっているのでしょうか。ほとんどがポーランド領とロシア領となっています。つまり、ドイツというのは、第二次大戦の結果として西へ大きく移動しているわけです。

だから、日本人にとっては、大変分かりやすい固有の領土というの、外国の人、特に大陸系の人にとってはなかなか分かりにくい。従って、外国の人に説明する場合は、どうしてこれがわれわれの領土なのかというのを、きちんとかういう最初の条約やその前の開拓、その後の住んでいたこと、そういう具体的な事例で説明できるようにしておかなければいけないと思います。

スターリンの過ち

#4

さて、先ほど、今年は戦後70年と申しましたが、戦後70年はある面でいくと屈辱ということでもあります。最も屈辱的だったのは、1945年2月にあるわけです。これは、2月4～11日まで、今はウクライナ、当時はソビエトの中のロシアの領土だったクリミアのヤルタで、ヤルタ会談が開かれたわけです。スターリン、ルーズベルト、チャーチルの3巨頭による会談で、ここで例えば国連の創設や第二次大戦後の世界秩序という基本的な枠組みが決まったわけです。しかし同時に、ここで彼らは非常に大国主義的な取引をしました。例えば、ポーランドの領土をどうするのか、あるいはドイツをどのように占領するのか。それとともに重要だったのは、日本ということです。このとき、ルーズベルトはスターリンに対して対日参戦を求め、スターリンはそれに対して、その代償として領土の拡大を求めたという有名なヤルタの密約です。このとき、その秘密協定に従ってスターリンは終戦間際、日本に参戦し、日本の正当な領土である千島列島を占領していったわけです。これが大国主義的な領土分割ということです。スターリンの領土拡張主義というものと、それに対してルーズベルトがずるずると妥協したというのがヤルタ会談です。

非常に屈辱的といったのは、1945年2月のこの結果をわれわれは知ることなく、特にソビエトを仲介して終戦に持ち込もうという交渉をしていたのです。しかし、そのときにもう、スターリンとルーズベルトは野合していた。つまり、当時の諜報能力です。ところが、最近明らかになってきたのは、実は、このヤルタの情報は各地から東京の参謀本部に知らせが届いていたけれども、それを握りつぶしていたということも明らかになっています。だから、これが屈辱的といったのは、この2～8月の間に東京大空襲がある、沖縄戦がある、広島・長崎がある、その後、北方領土問題、千島列島、ソ連の対日参戦がある。これはやはり、われわれの当時の指導部の甘さというものがあったと言わざるを得ません。

しかし、私が言いたいのは、このときにスターリンは東だけでなく西で領土を拡大したのです。そのスターリンのやったことが、ロシアにとっていいことだったのかどうか。スターリンは、確かに勝利者でした。領土も拡大しました。では、西でどこに領土を拡大したのでしょうか。これは、今、西部ウクライナといわれている地域です。これは大戦前、ポーランド領だった所です。この西部ウクライナは、ロシア帝国も含めて一度たりともロシア領にはなかったことのないウクライナです。ウクライナ人の多く住む所で、ポーランド人もたくさん住んでいました。そこを領土拡大しました。ヤルタ会談の記録を見ていると面白いです。この辺りにリボフという町がありますが、チャーチルはスターリンに、「リボフの辺りまでをポーランド領としてくれれば、世界はあなたのことをものすごく感謝するだろう」と言ったのです。ところがスターリンは、「われわれは血を流したんだ。その代償として受け取らなければいけない」ということで、ここまで拡大しました。

その結果が何だったのでしょうか。私は、1990年にまだソビエト連邦があるとき、このリボフ取材したことがあります。すごく驚きました。なぜかというと、まだソビエト時代でKGBも健在のとき、このリボフではレーニン像をことごとく引き倒していました。つまり、それだけ反ソビエト、反ロシアの雰囲気、気風がものすごく根付いていました。この西部ウクライナが、ソビエトの中のウクライナに入ったことで、ここからウクライナ独立運動が始まったのです。もし、これが入っていなかったら、私はその当時のキエフや東部の雰囲気からいけば、ウクライナはソビエトに残っていたのかもしれない。1991年12月、ソビエト連邦の崩壊はウクライナの独立決定で成ったわけですが、それも、もしかしたらなかったかもしれない。つまり、スターリンは領土を拡大したけれども、ロシアとは全く異質な、ロシアに対して敵意を持っている地域を自分の中を含むことによって、結果的には、50年後にあれだけ巨大な帝国だったソビエト連邦の崩壊の一因を作ってしまったということがいえると思います。これがスターリンの第1の過ちです。

#5

日本の領土問題というのは、大日本帝国の敗戦によって領土分割に伴い生まれてきたわけです。北方領土、竹島、尖閣諸島とあって、尖閣については領土問題ではないということですが、いずれにしても、その過程で発生してきました。スターリンの過ちと言いましたのは、つまり、スターリンは北方領土を占拠した、あるいは樺太を手に入れた、千島列島を手に入れた。シベリアにわが同胞60万人を抑留し、それを労働力として使った。ある面では短期的には彼は利益を得たわけですが。しかし、そのことによって、このロシアの観点から見ても何を失ったのでしょうか。それは、日本です。もし、あのとき、スターリンが日

本に対してニコライ 1 世のような長期的な視点を取り、日本との友好を重視するという視点を取れば、今の日本人の対ロシア感情はかなり違ったのではないかと思います。結局、彼は領土を拡大して日本との友好というものを失ったわけです。私は、このウクライナ西部での領土拡大というものと、この北方領土問題というのは、根っこは一つであると思います。スターリンの拡張主義は、決してロシアにとっても、ロシアの国益にも合っていない。これによって、ロシアが失ったものは大きい。このスターリン主義をどのように克服するかということが、北方領土問題の本質であるかと思います。

北方領土問題については、残念ながら、今のところ、交渉においてはロシアと日本の立場は正反対のままです。

日ソ共同宣言と東京宣言

#7

ここで幾つかの日ロ関係、日ロ交渉において重要な文書についてご説明したいと思います。一つは、1956 年の日ソ共同宣言です。これは宣言という名前が付いていますが、条約です。お互いの国の議会によって批准された条約です。日本とロシアは平和条約がないから、まだ戦争状態にあるという人がよくいますが、これは大きな間違いです。この日ソ共同宣言の締結によって、日ロの間の戦争状態は終わったのです。でも、なぜ宣言になっているのでしょうか。これは、平和条約に必要な一つの点で合意できなかったのです。それは領土問題です。領土の確定、これについて合意できなかったので宣言ということになったのですが、領土確定以外、平和条約で要求される全ての要件は、この中に入っています。

よく皆さんは、日ソ共同宣言は 2 島で、93 年の東京宣言は 4 島を交渉対象にしたということを知っています。これは大変な誤りです。ロシアは平和条約締結後、歯舞、色丹を引き渡すと書いてあります。これはみんな知っています。ところが、その前にもっと、それに劣らず重要なことが書いてあります。この宣言締結後も「平和条約交渉を継続する」とはっきり書かれています。このときの平和条約交渉とはどういうことでしょうか。これは領土確定交渉に他なりません。唯一残された問題は、領土確定である。この時日本は 4 島の返還を最終的に主張した、それに対してソビエトは小さな二島の引き渡しで決着させようとした。それで領土問題は合意できなかった。つまり平和条約交渉の継続とは、この 4 島の帰属の問題ということです。もちろん、ロシアは、これは 2 島だけだという解釈によって最大 2 島で決着させたい。プーチンもそういう立場かもしれません。しかし、われわれの立場は違うのです。ここの「平和条約交渉を継続する」、この点が重要なのです。だから、決して日ソ共同宣言は 2 島だという誤った解釈は取らないでほしい。これは重要なポイントです。

では、東京宣言と日ソ共同宣言の関係は何か。僕から言わせると、これは明解です。日ソ共同宣言には、弱点があります。平和条約交渉と書いてありますが、平和条約とはどういうものかというのをもう少し明確に書かなければいけなかった。そして、東京宣言には、「法と正義の原則に基づき 4 島の帰属の問題を解決して平和条約を締結する」とあります。つまりこれは、56 年共同宣言という平和条約とはどういうものであるべきかをより明確に規定したのが東京宣言ということです。つまり、平和条約イコール東京宣言の 4 島の帰属の問題ということで、56 年の日ソ共同宣言と東京宣言は、全く矛盾しないのです。この点

は、よく覚えてほしい。相互に補完し合う合意であることを強調したいと思います。

その後、イルクーツク声明、それから日露行動計画、これはプーチン大統領自身が署名したという意味で重要です。ポイントは、56年、93年を含む過去の合意をあらためて全て認めたことです。

平和条約交渉加速化で一致

#8

そして、今回の安倍政権になって重要な合意というのは、2013年4月の日ロ首脳会談における声明です。平和条約交渉加速化で一致したということです。重要なのは、その当時は戦後67年ですから、今だと70年と読み替えてもいいですが、平和条約が締結されていない状態は異常であると。そして、両首脳の間で議論に付すために幾つかの案を作りなさい、それは外務省の役目だということを定義しているわけです。これは現政権、安倍政権とプーチン政権の合意という意味で大変重要です。

この後、2013年から2014年2月までは、非常にうまくいきました。特に、2014年2月、ソチオリンピック開会式の日、安倍総理はソチに飛び、開会式に出席して、次の日に首脳会談を行いました。この開会式が行われたのは2月7日、北方領土の日ということで、日本国内でもいろいろな議論がありましたが、僕はこの北方領土の日には絶対行くべきだと思っていました。北方領土の日であるからこそ、ロシアに行かなければいけない。これが、例えば8月9日や9月3日なら、僕もちょっと反対したかもしれません。これは日本にとって非常に重要な、ソビエトの対日参戦に関わるさまざまな日にちですので、ちょっとと思いますが、この2月7日は日本にとっては全然悪くないです。『われわれが最初の条約を締結した日ではないですか、プーチンさん。この日はどういう日か覚えているでしょうね。あの日通好条約ですよ。おたくのニコライ1世が派遣したプチャーチン提督が調印した日通好条約、それによって国境はウラルと択捉の間と定めているわけではないですか』と。この日に行くのは、私は大賛成でした。そこであの平和条約交渉を行いました。

米ロ対立と日ロ交渉

#9

ここまでは大変うまくいっていましたが、その直後に起こったのは、ウクライナ問題です。これは非常に残念です。なぜなら、一つは、われわれ日本は残念ながらというか幸いなというか、ウクライナ問題に対して何の影響力もありません。しかし、そこで起きたことが否応なく日ロ交渉に影響してくるということです。

それはどういうことか。あの冷戦終結後、日ロ交渉というのはどうなったか。ロシアとアメリカの関係がある程度正常化して良くなったわけです。かつての冷戦のときのような敵同士ではないという前提のもとで日ロ交渉をずっとやりました。米ロ関係は行ったり来たりでだんだん悪くなっていきますが、それでも敵同士ではない。ある程度普通の関係だった。その前提でいっていたのが、ウクライナ危機で一変したわけです。アメリカはロシアを追い込む。制裁で追い込む。ロシアはアメリカを敵視する。あたかも仮想的な新冷戦といわれるような状況にもなってくる。そのことで、アメリカからは「こんなときに日ロ交

渉をやるのか」という圧力が実際にかかる。

逆に、ただアメリカも戦略を持っているかということも問いたい。アメリカの対ロ政策の基本は、中ロ同盟を阻止することです。中国とロシアをくっつけさせない。あまり過度にくっつけさせないというのが、これまでのアメリカの対ロ政策の基本中の基本だったのが、ウクライナ危機によって彼らはそれを忘れたかのようにロシアを追い込んでいきます。そうすると、確かにウクライナ問題でロシアがやっていることはけしからんが、これはヨーロッパの問題です。われわれが住んでいる北東アジアの状況は大きく違います。もし、中ロが同盟あるいはそれに近い関係、今軍事面も含めて関係を強化していますが、そういうことになったら、その仮想中ロ同盟と正面から向き合う国はどこでしょうか。ヨーロッパでしょうか。違います、日本です。日本ということは、日米同盟です。そのようなことは、われわれにとっては全く望ましくないわけです。従って、日本というのは、欧米との立場を同じくし、制裁には参加しますが、できるだけ制裁は遅く、できるだけ制裁の範囲は狭くという対ロ外交の独自性と欧米 G7 との統一という相矛盾する道を模索していくということなのです。

ウクライナ危機の中での対ロシア戦略

#10

ウクライナ危機の中での安倍政権の対ロシア戦略については、この4項目です。これもなかなか難しいですが、上の二つは欧米との協調です。要は、「G7の一員として欧米と協調する」。2番目は、「欧米の経済制裁の隙について利益を取るような行動はとらない」。これはどういうことかということ、欧米が経済制裁をロシアにしますから、欧米企業が出て行かない。例えば、エクソンモービルがやめる代わりに日本企業がその権益を取るようなことはしませんということです。

ところが、3番目。日本はロシアとの間で平和条約交渉がない。これは、ヨーロッパの国々とは全く違う状況がある。つまり、そういう事情があるので、われわれとしては平和条約交渉はウクライナ問題があってもやめることはしません。ロシアとの交渉、対話は継続します。それからもう一つ、これが一番大事なところです。中国の台頭という北東アジアにおける戦略的環境がヨーロッパとは全く異なります。従って、中ロとの二正面对立を避けるという意味で、日本としては北東アジアとの戦略的環境を考慮して、経済環境を含めてロシアとの関係は継続する。

こういう4原則を全て両立させるのはなかなか難しい。従って、日本の安倍政権の対ロ外交は、去年は非常に分かりにくい動きになったわけです。

北京 APEC での日ロ首脳会談

#11

去年の11月、北京のAPECで日ロ首脳会談がありました。主な内容は、日ロ首脳交渉の再開、首脳間の個人的信頼回復。安倍・プーチンの個人的信頼関係は大変いいです。今年の適切な時期にプーチン大統領が訪日する。重要なのは、会談は何人もいて拡大会談をやりますが、最後に10分間、安倍総理の求めによってプーチン大統領と通訳だけを交えて会談したということです。その中身は全く明らかにされておりません。プーチン大統領は、

ラブロフ外相にも「お前、外せ」と言って1対1で話をしたということです。ここでは、今年の交渉の進め方について意見の調整が図られたということを知っていますが、実際の細かいことは当然私も分かりません。

皆さま方も安倍総理に対してはさまざまな意見をお持ちであると思います。これは日本が民主主義国家であるから当然のことですが、対口交渉ということで行くと、私は日本の政治家の中では安倍総理が最適の政治家だと思います。一つは、やはり領土問題はリスクが伴いますから、北方領土問題は日口間の最大の懸案とはいいながら、多くの総理・政権にとっては最大の懸案、重要事項ではなかったです。これはなぜかという、日本にとってアメリカとの関係、中国との関係は死活的に重要です。ところが、ロシアとの関係は、ある意味では「この程度でいいじゃないか」と思うかもしれません。これは言うてみれば、ロシアとの関係がこじれても、日本にとって大きく響かないという面があります。そうすると、北方領土問題の領土交渉というリスクを負うことにあまり熱心ではない総理大臣も多くいたわけです。

ところが、安倍総理は違います。これは、一つはお父さんの影響があります。もう一つは、やはり戦後レジュームの総決算、そういうことを最近あまり言わなくなりましたが、彼の政治家としての目的だと思います。その中には、戦後残された問題を自らの手で解決したいということがあります。それが北方領土問題になるわけです。それからもう一つは、彼は日米同盟を重視していますが、アメリカだけに頼っていても駄目だ。中国なども含めたいろいろな国にバランスを取っていかなければいけない。ロシアとの関係を強化することは、対中国を考えても、日本にとってプラスになり、場合によっては対アメリカでもプラスになる。こういう考え方を彼は持っているわけです。

もう一つは、12月の総選挙で、安倍政権は2018年までということになります。今年の自民党総裁選挙も、よほどのことがない限り、そのまま再選されるでしょう。プーチン大統領の任期も2018年までです。感じとしては、もしかしたら安倍総理は2020年の東京オリンピックまで、そのためには自民党の規則を変えることが必要になりますが、2020年までやりたいと思っているかもしれない。プーチン大統領は、恐らく2024年までやるでしょう。そうすると、安定した長期政権同士の交渉になるわけです。政権が1年ごとに替わるような状況だと交渉もできません。つまり、安定した長期政権同士であり、あとは首脳間の個人的信頼関係がいい。プーチン大統領の安倍総理に対する評価も大変高いものがあります。

これはどうして大事かという、この領土問題を解決するとしたら、例えば日本は絶対4島だ。4島が返ってくればいい。ただ、これは相手があります。プーチンが4島に同意した場合、これはプーチンにとってはものすごいリスクですね。同意したけれども、相手がつぶれてしまったらどうしようもないわけです。あるいは、2島だと安倍政権にとってはこれもリスクです。そうすると、そのお互いのリスクをどう信頼関係の中で克服していくかということがあります。従って、この領土問題みたいな難しい問題については、首脳間の個人的な信頼関係が死活的に重要になってきます。

要は、私は日口というのは今、戦略的な利益がある程度一致している、敵同士ではないのだと思います。ただし、先ほど言ったように、日本にとっては中国、アメリカという、良い悪いは別として死活的に重要な国があります。日口というのは、そうではない。しか

し、日口はお互いの関係を良くすることが、他の外国との関係にとってもそのままプラスになるのです。そういう意味で、日口の戦略的な利益は、私は一致していると思います。

プーチン時代の歴史的使命

#13

最後に、プーチン大統領に望むことです。現代のロシア連邦は、やはり日本と同じように長い伝統のある偉大な国だと思います。文句なく大国、政治的な力のある国でしょう。ロシアを一言で言えば、僕は世界に残された最後の帝国だと思います。帝国という言葉は、僕は悪い意味で使っているのではなく、ロシアを多民族な国と捉えています。もし、ロシアをロシア人のためのロシアとしたら、これはロシアという国が分裂してしまうかもしれません。ロシアの中には、例えばトルコ系の人もあります。あるいは、コーカサスのような所もあります。あるいは、ウクライナ人も住んでいます。さまざまな民族が混じり合ってきた国です。そこは、日本とはかなり違います。だから、国民国家にはなり得ない国、そういう意味で帝国だと思います。

#14-15

では、プーチン大統領はどういう歴史的な使命を持っている人でしょうか。僕は、これは一言でいうと、反動政治家です。私は、これも別に悪い意味で言っているのではなく、歴史の中で彼が果たした役割というのは、反動、保守反動です。

これはなぜかという、20世紀のロシアの歴史です。ロシア革命によってロシア帝国が崩壊する。それから、1990年にソビエト連邦が崩壊する。このロシア帝国というのは、「専制・正教・国民性」、つまりロシア正教をイデオロギーとする国家、神をイデオロギーとする国家から、神を否定する Kommunizmus に一気に転換します。そして、また90年にそれが崩壊し、資本主義に行きます。2度の体制転換を経ました。しかも、2回の大戦でことごとくロシアが地上戦の舞台となったわけです。つまり、20世紀のロシアの歴史は、革命と戦争の世紀ということです。

プーチンが出てくるまでに、ロシア国民の雰囲気としては、「民主主義や改革も結構なものだけれども、もういい。何とか生活を安定してほしい」という気持ちでした。それに応えたのが、このプーチンです。革命を止めるという意味で、安定反動の時代をもたらしたのがプーチンです。その意味で、プーチンが今のロシアをつくったというより、時代がプーチンを求めたということだろうと思います。

#16

プーチンが日本をどのように見ているのか。私の推測も含みますが、プーチンにとって日本というのは、東においては理想的なパートナーになり得ます。中国との関係は、ロシアにとっては死活的に重要です。だから、中国との関係は戦略的パートナーシップと彼らは言います。ロシアにおける外交においては、中ロ関係を悪化させないことは本当に大事です。なぜなら、ロシアにとってこの200年で初めて強い中国と向かい合うことになったのです。だから、中国との関係はいい。しかし、中国の東北3省には1億人います。ロシアの極東には600万人しかいません。シベリアと合わせても2600万人です。そこには、中

国の望む欲しい資源などが全てあります。ロシアは、長期的に考える国です。そうすると、今はいい関係ですが、将来にわたってどうか。そうすると、中国とバランスを取らなければいけない。そうすると、ロシアにとっては、資金、資本、技術、そして1億人という人口のある東のもう一つの大国、世界第3位の経済大国である日本との関係が重要なのです。日本は絶対、北方領土は返してもらいますが、ロシアに対して領土的野心はありません。お互いに友好関係を望んでいるだけです。そうすると、ロシアにとって、ロシアの東を安定させるためには、日本との友好関係が重要です。

#17

これは、160年前に似ていないでしょうか。160年前を思い出してください。ニコライ1世がプチャーチンに与えた訓令のときの状況と似ていませんか。私は、根本的には変わっていないと思います。従って、プーチン大統領には、私からいくと、スターリン主義を克服して、日口通好条約のときの原点に戻り、ロシアの長期的国益の視点から日口関係打開に一步踏み出してほしいと願うものです。

以上です。ご清聴、ありがとうございました（拍手）。